

天国へ行ってきた手島さん



東京府中RC 栗山三郎

大東亜戦争中日本のロータリークラブはR Iを脱退させられたが、東京では水曜会と云う名のもとに例会が続けられていた。終戦になってから、1949年（講和条約が結ばれる前年）再びR Iに復帰することが出来、戦後始めてのガバナーとなったのが手島知健さんであった。同年の4月レーキブランチに国際協議会があり、戦後始めて日本人が出席したのも手島さんであった。

当時はまだ日本が残した戦争の爪痕の生々しい時でどこの国民も、特にフィリッピン人は、日本人に対して悪感情を大いに持っていた。そのフィリッピンからはハビヤ氏がガバ

9

ナーとして出席していた。会議の或る一日の朝、事務総長のラブジョーイ氏の演説の中に「私は今朝日本の小林雅一氏夫人より愛息の戦死の公報があったと云う悲しい便りを受けた。……戦争と云うものは、その敵味方にかかわらず、勝敗にかかわらず、主張の利非曲直にかかわらず、双方が共に被害を受けるものである。このような悲惨な戦争が再び起きないように国際間の平和を保つべくロータリアンは極力、努力しなければならない」と云う訓話があった。

そして会議の最終日にラブジョーイ氏は、ハビヤ氏と手島さんを壇上に招きこの会議に於ける感想を話すよう云われた。それで先ず手島さんは心から感謝の微笑をたたえて、「講和条約に先だってロータリーに復帰させてもらったことは、ほんとうに嬉しく思う。昨日まで敵であった人々の中に、たった一人でやって来た自分は、どんな恥かしめを受けるか、どんなひどい目にあわされるかと内心びくびくであったが、皆さんから大変に親切にされ安堵と感謝の念で一杯だ」と語れば、ハビヤ氏は「自分はこの戦争で日本軍に捕らわれ、ひどい目にあって来た。それで今まで日本及び日本人は実に憎いと思って来た。しかし今日この会場でラブジョーイ氏の話聞き、また日本人手島氏の笑顔を見たら、今までの憎しみは消えてしまった。これからはこう云う風に仲よくやってくるのだと云って手島さんの肩に手をかけ、お互に肩を組んで友情を示しながら壇上より下りて行った。その時会場は一瞬シーンとなったが、続いて拍手が満場をうずめつくした。その事があってからどこの国の人も日本人に対して温い友情を抱くようになった。そして「あのTOMOのスマイルは百万ドルだ」と云われるようになった。それ以来手島さんはジョージ・ミーンズ氏と共に日本のロータリークラブ拡大に協力され、今日の大をなす基礎を作った人である。

当時日本はガバナーが一人で大変な労働であったと同時に非常に名誉の事でもあった。

それで手島さんは次年度ガバナーとして北沢敬二郎さんを極力推薦したのであるがGHQの難色があり、当時のこととて泣く子と地頭には勝てず、前会長のアンガス・ミッチェル氏より、もう一度お前がやれと云われ。2年間ガバナーを務めたことは国際ロータリーでも珍しいケースではないかと思われる。この事が手島さんを肉体的にも精神的にも、大分過労に追い込んでいたことは事実である。

その手島さんが1955年（昭30）6月3日小田原RCのチャーターナイトが箱根塔の沢、観光会館で行われた際、戦後初のR I理事として挨拶されている時、脳血栓で倒れた。私は急拠塔の沢まで駆けつけ、3週間つきっきりで看護申し上げたのである。丁度2週間目に奇蹟的にも意識が回復され、何か話されるようになった。それから4～5日して手島さんは「どうも僕は天国へ行って来たような気がする、空が青々と美しく広々とした静寂そのものような所を僕は一人で歩いていた。あちらにも、こちらにも美しい草花が咲き乱れ老若男女がもの静かに、楽しそうに集っているが、僕の知っている人は誰もいない。僕はたまらなく淋しくなって来たので帰って来てしまった。考えてみるとあそこは天国だったのかも知れない。どうも僕も、僕の友人も天国に行けそうもないからね……。友人はありがたいものだ、お陰で助かったよ」とさきも愉快そうにほほ笑まれた。病気になってもこのようなユーモアがあるのである。その後1ヵ月半小田原RCの皆さんや内山知事を始め地元の方々の御好意により観光会館の一室で療養が出来、小康を得て東京の自宅に帰ることが出来た。それ以来床につかれ療養なさっている。

この永い10年間、東京クラブの皆さんを始め全国のロータリアンの方々の温い御見舞が続けられていることは本当に美しいものと思う。若しあの時手島さんが御病気にならず御元気でおられるならその後のR I会長になられたのではないかと思われる。 (小児科医)

10